報告

民俗資料の収集と保存に関する小規模博物館の状況

持田　誠（浦幌町立博物館 学芸員）

１．浦幌町立博物館の概要

北海道十勝地方東部に位置する地域博物館（郷土資料館型博物館）。前身は 1969 年設立の浦幌町郷土博物館。当初登録博物館だったが学芸員無配置と共に類似施設となり、2022 年度に再び登録博物館となった。学芸員 1 名、事務職員 1 名を配置。

２．資料収集方針

浦幌町の位置する東十勝地方を中心とする白糠丘陵一帯の、歴史・文化・自然に関する資料を収集・保存する。目的は、地域の歴史や文化・自然を後世の人々に永く伝えていくためと、地域を学術資源化し、人文・自然科学の両面から、地域の特色を明らかにし、そうした研究成果を地域に蓄積・公開していく拠点とするため。上記の方針・目的に照らして適合する資料は分野を問わず収集。

３．集めなければならない資料

地域＝事実上は行政区域。「ここで育った」「ここで暮らした」という人々の思いが染みついた資料。昔の資料だけでなく、「将来、この時代を記録する資料となる」ことを見越して現代資料も収集。代表的なものに「コロナ関係資料」の収集がある。

４．資料収集の流れと「廃棄を含めて収集」という考え方

寄蔵の打診があった際、現地へ出向いて選別してから受領するのが理想。だが、現実的には時間的余裕が無い状況が圧倒的に多いことから、「収集洩れ」を防ぐためにあえて「一括収集」を実施。「受領してから選別・廃棄」するため、毎年度「廃棄予算」を形状。現実にゴミ箱の収集により中から貴重な資料が出てきた事例があり、「資料損失を防ぐことは必要なコスト」を考え、「廃棄を含めて収集」を掲げている。

５．「同じような資料」が集まってしまう事例

全道の地域博物館に収蔵されている「上田式豆播器」は実態が不明なまま収蔵されてきたケースがほとんどで、正式な資料名もわからないでいた。北海道の学芸員ネットワークを通じて情報の共有化をはかり資料の実態を調査した結果、資料の発祥から改良までの流れが明らかとなり実態が判明。各地に類似資料が残っていたことの利点が明らかに。

６．緊急を要する地域資料の収集と現実

過疎化や耐震改修・空き屋や廃校の解体促進で、近代入植時の資料などが入手できる最後の時代に入っているが、地域博物館の実情はじり貧状態で、資料収集に適切に対応できていない状態。博物館資料の維持には「人と金」の両方が必要で、設置者にはそれなりの覚悟が必要・・・博物館の基本は資料保存（コレクション）

７．収蔵庫問題

収蔵庫が飽和状態になっている問題。また、光熱費問題は国立科学博物館レベルでも問題になりクラウドファウンディングで一気に明るみに。

一方、収蔵庫の飽和状態にしている原因の多くは「産業・生活資料」いわゆる「民俗資料」。どの博物館も同じような民俗資料を抱えており、新たな資料収集に踏み出せない原因になっている可能性が高い。

８．収集の目的から資料保存を捉え直す

地域資料の観点から、必ずしも各博物館が持ち続けなくても良い資料があるのではないか？代表的なものに「大量生産品」(工業製品や農具など)。専門館への移管や廃棄なども視野に入れて検討する必要がある。

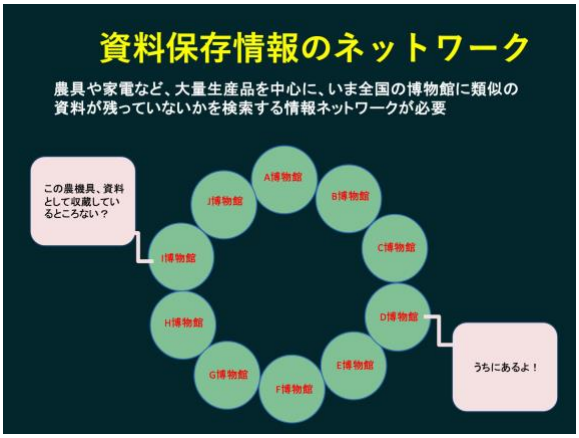
９．廃棄の検討：博物館にとって廃棄とは？

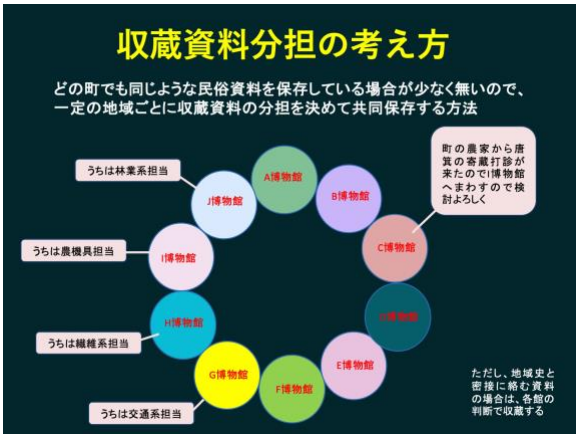
博物館にとって資料の廃棄は、「収集のための廃棄」であり、「廃棄のための廃棄」ではないことに注意。情報の新陳代謝を目的とした図書館の除籍とは考え方が異なる。

どの博物館も同じ資料を持ち続けることで新規の資料が残されない状態から脱するためにも、考え方や手続きを明確化した「博物館資料の廃棄」は現実的に必要な選択に。

１０．　博物館ネットワークの重要性

工業生産品である図書館の本と異なり、博物館資料は１点もの（１点ごとの資料が背負うストーリーも含めて１点ものの資料)。廃棄することで失われる価値を見定めるためには、単館的に判断するのは危険。その資料もしくは類似の資料が「どこか」に残っているか？の確認と、その資料を失っても資料性・記録性を代替できるだけのコレクションがあるか？の確認が必要。そのためには、資料情報に関する博物館同士のネットワーク構築が重要となる





資料保存情報のネットワークと収蔵資料分担の考え方